

令和 6 年 4 月 19 日

(※受付番号)

教 育 長 様

研究コース
A グループ研究 A
校園コード（代表者校園の市費コード）
531062

代表者 校園名： 大阪市立野田小学校
 校園長名： 石崎厚史
 電話： 6461-0520
 事務職員名： 児嶋 桜子
 申請者 校園名： 大阪市立野田小学校
 職名・名前： 主務教諭 屋良 一輝
 電話： 6461-0520

令和6年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	継続研究（2年目）
2	研究テーマ	個が輝き、共に育ちあう学級をめざして —「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実—			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を項立てて記載してください。</p> <p>○社会科・生活科の授業スタイルを問題解決的な学習へ転換することから始め、「確かな知識をつかむ問題解決的な学習」、さらに学級経営的な要素の比重も大きくし、「個別最適な学びと協働的な学び」に焦点を当てて研究を進めてきた。その結果、「書くこと」「話合い」の価値を感じている子どもが育ってきており、5年間の研究の成果に手応えを感じている。一方、「個別最適な学びと協働的な学び」に関しては、自分で「決める」「選択する」「進める」や子どもや話し合いの内容を深め話し合いの価値を感じている子どもが育ちつつあるが、今後も継続的に研究していくことが必要であると感じている。</p> <p>○研究を進めていく中で、「個別最適な学びと協働的な学び」という理念は共通理解されているが、具体的な手法や手立て、個に対する見取りなどについては共通理解すべき事項がまだ見出しありが現状である。さらに焦点化して研究を進め、他教科にも生かせる具体的な手法を見出していく。</p> <p>○研究を進めていく上で、キーとなる授業研究が、学年や研究部での関わり方に差が見られたり、研究授業で獲得した教師としてのスキルがうまくその後の授業に活用されていなかったりという課題がある。教師の学びは直接子どもに影響するため、教師教育からのアプローチも新しい視点として研究を進め、授業研究の前後のプロセスをどのように創っていけば教師の学びに焦点化できるかを明らかにしていく。</p>			
		<p>(1)研究内容の詳細 ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>R4 大阪市学力経年調査 「授業の中で目標が示されたり、自分で目標を立てたり…」⇒最肯定回答市平均より+10ポイント 「授業の中で学習内容をふり返る活動をよく行っていた…」⇒最肯定回答市平均より+11ポイント 「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたり…」⇒最肯定回答市平均よりも-3% R4 校内調査 「学級のみんなは自分のいいところを知ってくれていると思いますか」 ⇒学級にかかる他の項目より約-10点 イントロ</p> <p>昨年度から「個別最適な学び」と「協働的な学び」について研究を進めてきた結果、自分で学びを調整する力の基礎はつきつづつある。一方、対話の深まり、すなわち、お互いを認め合うきっかけとなる対話の良さや、学びの深まりとなる対話という点ではまだ課題が大きい。また、個への支援も十分とは言えない。 そこで、以下の2点の視点で研究を進める。</p> <p>①自分で学びを「決める」「選択する」「進める」子どもをの育成 ・「個別最適な学び」の視点を生かし、個と集団の両方の手立てによって子どもが自分の学びを自己調整し、学び手としての主体性も育成する。 ・子どもの個での活用と指導者の個の見取り、子ども同士の考え方の共有を目的としてICTを活用する。</p> <p>②「なんで?」「つまり」「たとえば」が言い合える学級集団づくり ・「なんで?」が言い合えることは、発言へのストレスがない状態である。また、子どもが「つまり」と「例えば」を往還することは、学びの内容を理解していることになる。 ・学級でお互いを認め合い、協力関係を築くため、プロジェクトアドベンチャーの手法を活用する</p>			
		<p>(2)継続研究〔2年目〕 ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p>			

研究内容	<p>R5年度大阪市学力経年調査における「学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な回答をする子どもの割合は前年度比+8.8ポイント、校内調査における「学習の中で自分で学習方法や学習内容を選んだり、決めたりしたことがありますか」に対して、目標値比で+10ポイントと研究テーマに対する一定の成果はでている。しかし、個々の子どもの学力差や意欲の差などは歴然としてあり、子どもひとりひとりへのアプローチやその基盤となる学級経営についての一定の共通理解が不十分であることは否めない。「誰一人取り残さない学力の向上」という目標がある中で、子ども全員を支えていく必要がある。</p> <p>そこで、昨年度の視点をプラスアップした形で、以下の通り研究を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①自分で学びを「決める」「選択する」「進める」環境設定をどう創るか <ul style="list-style-type: none"> ・複数資料から自分で「決めたり」、教材を自分で「選択」したり、振り返りを自分で進めたりするなどの可能性を追究する。一斉授業に限らず、個別で進める授業構成なども視野にいれる。 ②子どもの個の見取りと具体的な支援をどのようにするか <ul style="list-style-type: none"> ・「個別最適な学びと協働的な学び」のためには、個々の子どもをしっかり探していく必要がある。ICTも有効活用をし、子どもについて十分に語れる研究を進めていく。 ③「なんで?」「つまり」「たとえば」が言い合える学級の土壤と言い合える価値ある問い合わせとは何か <ul style="list-style-type: none"> ・学級集団づくりという昨年度の研究を深めていくと共に、子どもが話したくなる、話す必要があると感じる問い合わせもある。社会科・生活科の中で子どもの問い合わせや疑問をもつとうまく活用していく方法を研究する。 ④子どもにも教師にも価値がある授業研究をどう創るか <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの授業研究の営みを否定するわけではなく、授業研究の前後のプロセスや協議会の方法、他教員の関わりなどを見直し、子どもも教師も育つ授業研究の在り方を探る。

研究コース

A グループ研究 A

代表校校园コード

531062

代表校園

大阪市立野田小学校

校園長名

石崎厚史

	日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。
	<p><4月> 【研究推進委員会①】 研究主題等 素案づくり 教員・児童への事前アンケート 【研究全体会①】 年間研究計画の共通理解</p> <p><5月> 【全体研修①】 学級づくりおよび個別最適な学びと協働的な学び</p> <p><6月> 【授業研究①2年】 (研究協議会 指導案検討会) 講師 関西福祉科学大学 馬野範男教授</p> <p><7月> 【授業研究②5年】 (研究協議会 指導案検討会) 講師 岡山理科大学 紙田路子准教授 【全体研修②】 個別最適な学びと協働的な学び 講師 関西学院初等部 宗實直樹先生</p> <p><8月> 【全体研修③】 QU活用ワークショップ 講師 大阪教育大学 水野治久教授 【全体研修④】 学級経営 講師 愛媛大学大学院 白松 賢教授</p> <p><9月> 【授業研究③4年】 (研究協議会 指導案検討会) 講師 愛媛大学 井上昌善准教授</p> <p><10月> 【授業研究④6年】 (研究協議会 指導案検討会) 講師 岡山理科大学 紙田路子准教授 【研究推進委員会②】 公開授業指導案検討 研究発表内容検討 【小社研島根大会参加】 (参加後に内容の伝達)</p> <p><11月> 【大阪府社研北河内大会参加】 (参加後、内容の伝達) 【がんばる先生支援研究発表】 公開授業(3年)・研究協議 指導助言 講演 大妻女子大学 澤井陽介教授(元文科省 視学官)</p> <p><12月> 【児童・保護者アンケート実施】 実施後、集計・分析 【研究推進委員会③】 区教委研究発表会 発表内容検討</p> <p><1月・2月> 【小教研福島支部教員研究発表会】 研究発表 研究協議 【近小社研和歌山大会参加】 参加後に内容伝達 【研究全体会②】 今年度のまとめと次年度の計画</p>
5	活動計画
	<p>出張を伴う研究会への参加、外部講師を招聘する研修会の実施等、経費執行が必要な取組を記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国小社研島根大会、近畿小社研大会、大阪府小社研大会 参加 ・授業研究指導講評 関西福祉科学大学 馬野範男教授 岡山理科大学 紙田路子准教授 愛媛大学教育学部 井上昌善准教授 ・公開授業指導講評 大妻女子大学 澤井陽介教授 ・授業づくり研修会講師 関西学院大学初等部 宗實直樹教諭 ・学級づくり研修会 愛媛大学大学院教育学研究科 白松賢教授 ・QU研修会 大阪教育大学 水野治久教授
	<p>(1)継続研究(2年目、3年目)において検証方法の変更の有無を記入してください。</p> <p><input type="checkbox"/> 変更しない。 <input checked="" type="checkbox"/> 変更する。 理由 新たに研究内容の修正があり、それに合わせて検証を変更したため</p> <p>(2)大阪市教育振興基本計画に示されている、「子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上」および、「教員の資質や指導力の向上」について見込まれる成果を端的に記載し、その成果について客観的な指標により、必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。(いずれかに☑を入れてください)</p> <p>【見込まれる成果1】 <input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>つなぎ言葉や内容を深める言葉を活用することで、学習の中で対話的な活動を活発化させ、対話の内容が深まることが期待できる。対話の内容が深まると自分の考えの変化にも気づき、学びの実感を感じることができる。</p>
6	<p>見込まれる成果とその検証方法</p> <p>《検証方法》</p> <p>小学校学力経年調査における「学級の友達との話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最肯定的な回答をする子どもの割合を前年度より向上させる。(R50%)</p> <p>【見込まれる成果2】 <input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>個に応じた学びである個別最適な学びに焦点をあてて手だて・方策を研究することで、子どもに任せられる部分を生み出し、学びを自分で調整する自立した学び手の基礎を育成する。</p>

《検証方法》

校内調査「学習の中で自分で学習方法や学習内容を選んだり、決めたりしたことがありますか。」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を前年度より向上させる。(R5 90%)

6	見込まれる成果とその検証方法	<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input type="checkbox"/>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/>教員の資質や指導力の向上</p> <p>子どもの様子、発言、表現物から、子どもの思いとその背景を推測する見取りの方法や、適切な支援により、誰一人取り残さない学力向上と個別最適な学びの実現を目指す。</p> <p>『検証方法』</p> <p>校内調査「学校では一人一人が大切にされていますか」に対して、肯定的な回答をする子どもの割合を前年度より向上させる。(R5 95%)</p> <p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/>教員の資質や指導力の向上</p> <p>授業研究を通して、今後の日常の授業の何を生かせるのか、他教科へ活用できる手法や考え方を学び、教師の成長に寄与できるようにする。</p> <p>『検証方法』</p> <p>教職員アンケート「研究授業の実施や観察を通して、日常の授業や他教科へ役立つことを学ぶことができた」に対する肯定的な回答の割合を80%以上にする。</p>						
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 報告書提出日（令和7年2月21日）までに必ず行ってください。</p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="409 1006 1446 1073"> <tr> <td>日程</td><td>令和 7 年 11 月 15 日</td><td>場所</td><td>野田小学校</td></tr> </table> <p>◆waku^{x2}.com-bee掲載による共有【必須】</p> <p>○掲載の日程（予定）</p> <table border="1" data-bbox="409 1163 981 1230"> <tr> <td>日程</td><td>令和 7 年 2 月 21 日</td></tr> </table> <p>◆他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 7 年 11 月 15 日	場所	野田小学校	日程	令和 7 年 2 月 21 日
日程	令和 7 年 11 月 15 日	場所	野田小学校					
日程	令和 7 年 2 月 21 日							
8	代表校園長のコメント	<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>令和元年度から4年間の研究を通して、授業改善についての一定の成果は見られた。「授業が変われば子どもが変わる」とよく言われるが、「子どもが変わると教師も変わり（更に授業改善が進む）」、授業改善の営みが楽しいと感じる教員が増えてきた。しかしながら、令和3年1月に出された中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の2本柱、①個別最適な学び、②協働的な学びの実現という点では、まだ大きな隔たりがあり、手探り状態であることは否めない。2020年代も中盤となった現在、まずはその基盤をしっかりと固めるために、教職員が一丸となって本研究を推進し、2030年代以降の時代を力強く生き抜き未来を切り拓くことのできる子どもを育てていきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>昨年度の研究活動を通して、「令和の日本型学校教育の構築を目指して」（R3.1の中教審答申）の2本柱、①個別最適な学び、②協働的な学びの実現に焦点を当てて授業改善を試んできた結果、手探り状態であった年度当初に比べ、一定の方向性が見いだすことができた。</p> <p>今年度は、昨年度の研究から課題として見えてきた具体的な手法や手立てに焦点を当てるとともに、教師教育からのアプローチも視点に加え、授業改善の営みによる子どもの育ちと教師のスキルアップがスパイラルに伸びていくことができるよう、より一層教職員が一丸となって本研究を推進していきたい。その結果、2030年代以降の時代を力強く生き抜き未来を切り拓くことのできる子どもを育てていければと考えている。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>						